

## NOEL PATONの版画 神保 菘

文教大学越谷図書館のシェリー・コレクションの中に、*Compositions from Shelley's Prometheus Unbound, Twelve Engravings in Outline* by Sir J. Nobl Paton という珍しい書物があり、私は1992年7月に同図書館にお邪魔した時はじめて見せていただいた。シェリーの『プロミシウス』をもとに制作された12枚の版画に、それぞれに対応する詩行を付したものである。今改めて同書のコピーと、シェリーの詩とを吟味してみると、色々な願望や、問題点が浮かび、将来これをもっと発展させてこのシェリーの作品の挿絵を画いたらどんなに面白いだろうという気持ちに掻き立てられる。更に重要なことは、自分で絵を<sup>か</sup>画くつもりで本文を読んでみると詩行解釈に曖昧さが許されないことである。そういう意味でペイトンの仕事は貴重にして興味あふれる試みであると思うのでここでは12枚の中5枚につき詩と画を照合してみたい。

Plate I. Act I. [II. 325-346] (表紙図) プロミシウスがジョウヴに負けてしまったと思って「大地」が悲しんでいる丁度その時雪を頂いた山の彼方から、ジュピターの使いマーキュリーが、黄金のサンダルをはいた足で山から吹き降ろす風をけりながら、右手に魔法の杖を高くかかげてやって来る。その背後からはまるで蒸気が立ちのぼるように無数の復讐のフェアリーの群が蛇の頭髪に翼は鉄、その力で風を逆のぼってプロミシウスを餌食にしようとやって来る。マーキュリーはフェアリーたちを押えつける。

ペイトンの画では右手上方に大きくマーキュリー、右手手前にはわずかにプロミシウスの鎖と岩が見え、左手前に蛇の頭髪をしたフェアリーたちが、マーキュリーに反抗して騒いでいる。若々しい少年の姿のマーキュリーや、いかにも他人の苦しみで養われるフェア

リーたちの様子はよく描かれている。不足を言えばマーキュリーにはもう少しスピード感が欲しい。314-319行の山の彼方から風をけり、雄大な大空を駆けて来る様が欲しいし、仮りに静止している瞬間をとらえるとしても、世界を駆け廻る「使いの神」ならばもっと鍛えられた筋肉が欲しい。フェアリーの方も 'with hydra tresses' (I.326) はよく現わされているが、'with iron wings' (I.327) は不十分であるし、'that climb the wind' (I.327) という風を逆のぼる勢いとか、'Like vapours steaming up behind' (I.329) とか、'Clanging loud, an endless crowd' (I.330) という無数に群がる様も十分現われていない。4人だけのフェアリーと向き合ってマーキュリーがにらみつけているこの構図よりも、もっと力強く雄大で動きのある構図を望みたい。

Plate IV. Act II. Scene ii [II. 1-6, 64-82]

これは12枚の画に選ばれた場面の中で最も面白い情景であろう。二人の森の神フォーンが森の精の神秘を語るというシェリー好みの科学と詩的想像力が見事に融合する場面である。即ち蜜蜂も通わぬ森の奥で、フォーンたちもいつも歌声だけを聞いて、姿を見たことがない。妖精たちはどこにかくれているかということになって、二番目のフォーンが、妖精たちのことをよく知っている連中の話として語るには、声の主の妖精たちは水泡の中に住んでいて、そういう水泡は太陽の魔術によって清らかな湖や泉の底の泥土を一面蔽っている淡い色の水中花から吸い上げられたもので、この水泡が妖精たちのすみかである。彼等はこのおおいに入って緑と黄金の大気の中を漂い廻る。この水蒸気(=水泡)は温度が上昇すると破裂し、今まで輝く丸いすみかの中で妖精たちが吸っていた空気は火のように薄く軽くなって天へ戻り、夜空を流れる流星のように流れる時、妖精たちはその気体に乗って、真逆様に降下する速度を巧みに操り、その燃える頭を下げて燃える火となって地上の水中にもぐり込む、というのである。水分が植物

から太陽熱により吸い上げられ、再び露、雷電、雨となって降下する様が見事に美しく描かれている。

このあたりの面白さは、水泡に、そして大気に妖精が住んだり、乗って活動したりするという発想にあり、その面白さをどう画くかが最も興味あるところであるが、ペイトンはフォーンたちの見守る前に、かすかに見えるよううすい線で小さな女性の姿の妖精を画いているが人間の姿をし過ぎるし、フォーンも殆ど人間の姿のままで、わずかに尾の名残らしいものがついているだけである。森の雰囲気はかなり出ているが、日中、陽も通らぬ深い森の奥の様子は今一つであるし、妖精やフォーンの画き方にもかなり研究の余地がある。

Plate V. Act II. Scene iv. [ll.129-141, 156-168]

妖精の声に導かれてエイシヤとパンシアは遂にデモゴゴンの洞窟に到り、エイシヤは宇宙の神秘や運命について質問をし、ジョウヴ没落の運命の時はいつ来るのかとたずねるとデモゴゴンは「見よ」といったかと思うと（以上Ⅲ. iii&iv.128まで）、洞窟の岩が割れ紫色の夜空を虹色の翼をつけた駿馬がうす暗い大気の中の風を踏みつけながら馬車を曳いて来るのが見える。それぞれの馬車にはらんらんと眼を輝かせた御者が立って馬車の飛翔をかりたてている。御者たちの中には悪霊に追われている如く後をふり返る者もおれば、目を火のように輝かせて、自分の愛する者が逃げて行くのを追うように前かがみになって必死に進もうとする者もあり、御者たちの輝く金髪は流星の房のように流れ皆疾走して行く。これら不滅の「時」の馬車が群をなして疾走する一方、エイシヤたちがふと見ると天と地の果て近くにもう一台馬車が止っている。それは真赤に燃えさかる火の象眼細工を施した象牙製貝型の車体で、その火は絶妙な模様を彫刻された辺の中でゆれ動いている。この馬車にエイシヤたちが乗るのであるが、これを画に描くとどうということになるか、実に難

解かつ興味あるところである。‘An ivory shell inlaid with crimson fire’ (Ⅱ .iv. 157) とは真赤に燃える火を赤い宝石かエナメルかガラスを象牙にはめ込んで描き出してあると考えたい。‘ivory shell’は象牙で出来ている車体が帆立貝の貝殻の形をしているのではないか。海神の娘エイシヤたちを乗せるのであるし、ヴィーナスの誕生を想わせるこのあとのエイシヤ誕生の場面 (Ⅱ .v.20-28) を考えると今 (Ⅱ .iv.157) エイシヤが乗る馬車が帆立貝の形をして愛の火が燃えていてもおかしくはない。ペイトンが貝の形に描いているのはそういう意味では面白い。ただペイトンの貝は中に何の飾りもない普通の貝なのでその点は失望する。又この場面最大の面白さは不滅の時の馬車の疾走とこの貝の馬車がエイシヤを乗せるために天の彼方で静止して待っている静との対照、更にそれに加えて、大いなる天蓋を背景とする壮さであるが、残念ながらペイトンの画では不滅の時の馬車が

Plate VIII. Act III. Scene i. [ll.74-83]



大写しになり過ぎて、広大な天空を見渡す光景も描けていないし、スピード感もない。

Plate VIII. Act III. Scene i. [II.74-83]

ミルトンのサタンが墮落させられた時を想起させる。地獄の火の海に荒廃した世界もろともジュピターが墮ちる場面である。ペイトンの画は一つの表現方法を示してくれる。マントにくるまったような形で征服者デモゴゴンは雲間から覗いてジュピターを突き落とし、ジュピターは真逆様に火の海らしいところへ落ちて行く。彼方では戦いの終結と共に驚きの余り太陽の馬車がしばし停止し、同時にデモゴゴンのマントのような雲で光がさえぎられる。この段階までこの画は面白い。だがジュピターがこの荒廃した世界もろとも、「地獄の、嵐のように荒れ狂う山なす火の海に一旦落ち、そこから奈落の底へ落ちる」(III. ii.74-77) 部分は殆ど表現されていないので今後の課題になる。

Plate X. Act III. Scene ii [II.44-8]

オケアーノスとアポロンはジュピター没落の話をも早く切りあげてそれぞれの宮殿に戻って朝の仕事を始めなければならない。オケアーノスが治める海の宮殿では海の妖精たちが美しく舞う。それがこの画の場面である。緑なす海の中で、風のように流れる海の流れにしなやかな手足を乗せて、美しい髪をなびかせながら、彼女たちの大いなる姉君エイシヤを祝福するために色とりどりの花冠をかかげもって舞いながら妖精たちはエイシヤのもとへと急ぐ。この様子をペイトンは実に美しく優雅に描いている。もし欠けるものがあるとすれば一つの方向へ進むスピード感であろうか。

以上の如くペイトンの仕事は大変興味ある試みである。そこでもう少し工夫すればるかに効果的な作品に仕上がると思われることを二点にしぼって指摘しておきたい。

第一点は画面設定である。物語の進行と共に刻々と場面が変わる。Plate IV. の森の妖精が水泡と共に天空へ昇り又急激に降下して水中

にもぐり込む様子などは二枚以上の絵にするとも効果的であろう。ギリシアの壺絵などで物語を壺や酒杯の周囲に連続的に描くのは見ても楽しい。例えば大英博物館に蔵されている前480年頃の赤絵の酒杯には、トロイ戦争でアキレウスに与えられた女性ブリセイスがアガメムノンに奪われる話で、片側にはアキレウスの陣営から連れ出されるところを、反対側にはアガメムノンのところへ連れ込まれるところが描かれている。(H.A.Shapiro, *Myth into Art: Poet and Painter in Classical Greece*, Routledge, 1994, pp. 13-14参照) 又 Plate I でマーキュリーとフエアリーたちが大空をわたって来るところをもっと画面を大きく使って山や空、風等を入れると宇宙を駆ける壮大さ、軽快さ、迅速さが表現出来てシェリの詩に適した魅力的な作品になると思う。同様のことが Plate V にもいえる。

第二点は描き方にもう少しスピード感、力強さ、逞しさが欲しい。同じものを描いても筋肉の状態、姿勢、バランス、線の使い方によってがらりと変わってくる。例えば Arthur Rackham の *Color Illustrations for Wagner's "Ring"* Dover Publications, 1979の絵はどれも我々を魅了するが *Das Rheingold*, SCENE I の三人娘の水中のスピード感等は是非ともシェリの詩を描くのにとり入れたい。Plate I のマーキュリー、Plate X の海の妖精等ももっと魅力的な絵になると思う。

以上随分欠点を指摘し過ぎたかも知れない。しかしこれが私の本来の意図ではない。特に難解な、しかも美しいシェリの詩を画にするという大変な試みに挑んだペイトンにまず敬意を表し、魅せられた余り吟味して行く中に注文が多くなってしまったが、実際絵に画こうとすると普通に詩だけを読むよりもはるかに正確な理解と把握が要求される。この書物はシェリの死後メアリ・シェリに献じられているので約150年経っているがペイトンは今だにシェリを読む者に貴重な刺戟を与えてくれる。(立命館大学教授)